

HILLERら¹⁾は、ルバーブの花成について、'Victoria'を用いて調べたところ、苗齢と低温条件によって反応が異なることを明らかにしている。すなわち、実生から育てた苗を、0、5、10°Cの処理をしたところ、10°Cでは花成を起こさないが、16週以上の苗では、0°Cと5°Cで抽だい開花し、13週苗ではこれらの低温でも抽だいたないと述べている。

著者は、'Myatt's Victoria'を実生より栽培する時に、春播きは翌春に抽だい開花するが、秋播きでは翌春には抽だいたせず、さらに次年の春となることを観察している。

抽だい開花は、根株の消耗となり、また種子茎が2m近く伸びて倒伏しやすくなるので、栽培管理上は抽だい開花しにくい品種が良い。

神奈川県における'Myatt's Victoria'の年間の生育状況は次の通りである。早春(3月上旬頃)にほう芽し、初夏(5~6月)に生育が最も旺盛となる。梅雨開け以降の夏には高温のため生育は衰える。秋(10~11月)になって草勢がやや持ち直すが、成長は緩慢であり、冬に向かって成長は止まり、12月中旬頃に地上部は枯れる。ほう芽後間もなく、花茎の伸長がはじまり、4月下旬から5月下旬が開花期となり、種子は開花後約1か月で結実する。

2. 栽培方法

ルバーブの栽培方法は2つに分けられる。1つは露地で生育旺盛な季節に収穫する露地栽培であり、他は冬に根株を掘り取り、軟化施設内で生育させる軟化栽培である。軟化栽培は露地栽培の発展としてとらえることができるので、まず露地栽培の要点を記し、次項で軟化栽培法を詳しく述べる。

(1) 繁殖法

ルバーブは他家受精をするため、種子繁殖では個体間のばらつきが大きいが、根株の入手が困難なときや、当初大量にふやすためには種子を用いる。

播種期は4月上中旬で、一定の栽植距離に数粒づつ直播きする。本葉4~5枚時に1本立ちとなるように適宜間引きをする。畑の都合や幼苗期の除草等の管理のために、ポット育苗をする方法もある。この場合、ハウスを利用し、2~3月に4寸ポ

ットに播種し、5月に本葉4~5枚で定植する。生育適期が5~6月のため、早播きほど早く大株に仕立てられる。また、秋播きも可能で、9月上旬が播種適期である。なお、発芽適温は25°Cくらいである。

このように、まず種子繁殖を行って、栽培株の中から優良株を選抜し、この株分けにより徐々に増殖することを推めたい。

株分け法は、ほう芽前の2月頃掘り取り、切り離す根株に芽が必ずつくようにタテに切断する。2~3年以上の根株ならば、8~10個に分割できる。

(2) 施肥

多年生作物であるため、根の充実を計る肥培管理が必要である。

施肥法については現在検討しているが、暫定的に次の基準で施肥を考えている。

初年度は、播種または定植株に深耕し、たい肥を十分施用し(10a当り3~4t)、化成肥料は三要素をそれぞれ10~15kgとする。翌年目からは、根株の休眠中の1~2月にたい肥2~3tを施し化成肥料は、ほう芽期と生育最盛期に3要素をそれぞれ10kgを与える。

土壌酸度はpH 6.0~6.8が最も良いが、pH 5程度⁹⁾の酸性土に耐えるとされている。

(3) 栽植方法

大型の野菜であるため、畝間、株間を十分とる必要がある。畝間120~150cm、株間60cmとする。条件が良ければ、10~15年間収穫を行えるが、4~5年で株の更新をし、強勢な株を保持することに努めた方が良いと思われる。

(4) 収穫

収穫法は、30~50cmに伸長していた葉を基部より手で順次かきとる。一度に採葉しすぎないように注意する。その後、2週間くらいたつと新芽が伸長してくるので、次々に収穫できる。収穫期は5~6月で、初めの収量は少ないが、6月下旬頃が最も収量が多い。葉が老化すると、葉柄に'す'が入るので収穫しない。生育期には、いつでも収穫ができるが、根株の保持、養成のためには、収穫期は2か月程度に止めておくべきであろう。初年度は収穫しないので株の養成に努め、2年目以降の